オーストリアの食事をレポート

松戸 はな さん＝胆沢区＝水沢高校１年

オーストリアの食事で驚いたのは、まずその量の多さです。日本では、一品一品の量は少なく、食べ合わせながら味わうというのが一般的だと思います。しかし、オーストリアでは一つの大きなお皿に一人前とは思えないほどの料理が乗ってきます。

例えば、〝シュニッツェル〟という料理。日本のカツに近いかもしれませんが、自分の顔よりも大きい肉に、ポテトが大量に添えられて出てきたときの衝撃は忘れられません。でも、量は別として味は最高です。日本ではあまり馴染みがないと思いますが、肉やポテトにブルーベリーやストロベリーなどのジャムを付けて食べます。甘酸っぱいジャムとシュニッツェルの風味は、香りや見た目も含めてとてもおいしいです。

また、何度も食べて記憶に残っているのが、〝カイザーシュマーレン〟です。これはオーストリアで最も有名なデザートの一つだそうです。薄いパンケーキを細長く裂いたもので、粉砂糖が振り掛けられ、アップルソースなどを付けて食べます。これも量は多いですが、パンケーキの甘さとソースの酸味がうまくバランスを取っていて、飽きがこない味です。

今回紹介した料理はほんの一部ですが、とにかく量が多いです。日本人だと一品で満腹になってしまうかもしれませんが、味は保証します。日本食とはまた違った概念で組み合わされた食材たちが見事に調和し、観光客はもちろん、現地の人たちを魅了し続ける、素晴らしい料理がたくさんありました。

◀程よい甘味と酸味でペロリと食べられるカイザーシュマーレン

私の顔よりも大きな▶シュニッツェル。本当に衝撃でした

文化や習慣の違いを感じたこと

佐野 陽菜（はるな） さん＝水沢区＝岩谷堂高校２年

今回、さまざまな文化の違いを感じた中で、驚いたことや不思議に感じたこと　と、思わずクスッと笑ってしまったことなどをご紹介します。

ホストフレンドのニーナと散歩していたときのことです。すれ違う街の人たちがとてもフレンドリーな笑顔で「ハロー！」と声を掛けてくれました。また、野外フェスティバルでオーケストラの演奏を鑑賞しているときに突然「指揮をやってみない？」と声を掛けられました。もちろん私の答えは「やってみたい！」の一言。全く合っていない私の指揮でも盛り上がってくれ、たくさんの温かい拍手をもらいました。日本では見ず知らずの人に声を掛けることは少ないと感じます。誰にでも分け隔てなく接する姿勢は、今回訪れた地域の人たちの大きな特徴です。

インスブルックの街では、ディズニーのキャラクターに出会い、まさかチップを要求されるとは思わずに、一緒に写真を撮りました。その他にも、一部の公共トイレにまで料金が発生することに驚きました。ニーナは、それは当たり前のことだと教えてくれました。さらに、飲み物には氷を使わないことや、アイスコーヒーを注文すると、冷たいコーヒーではなくパフェのようにアイスクリームが入ったものが出てきたことにも意表を突かれました。

文化や習慣の違いを具体的に知ることができ、いろいろな国の文化を学びたいと思うきっかけになりました。深く心に刻まれた９日間でした。

◀これがオーストリアのアイスコーヒー。まるでパフェですよね

まさか指揮をやらせて▶もらえるなんて！みんなフレンドリー♪

❶ハーネンカム山でアスレチックに挑戦　❷ハイライン179から望むエーレンベルグ城　❸街並みはとてもファンシーでかわいかったです　❹姉妹都市の派遣学生（左から）ベンジャミン、デイヴィット　❺川原の石や枯れ木を使ってバーベキュー　❻野外フェスティバルでのオーケストラ演奏　❼夕食会での一こま。ホストフレンドの妹も一緒に　❽別れの朝。「ありがとう」の気持ちと涙が溢れる　❾エーレンベルグ城からロイテの街を一望　❿博物館の体験コーナーで昔の衣装を身に着け大変さを実感。重かったです…

交換交流が育む国際感覚と多文化共生の社会

平成7年に旧江刺市とロイテ・ブライテンヴァング市（以下、「ロ・ブ市」）との間で始まったこの青少年交換交流事業に、これまで参加した青少年は70人以上。10代の多感な時期に海外の同年齢の若者に出会い、生活を共にする経験は、国際的な感覚を養うだけでなく、生涯にわたる友人を作ることにもつながる非常に有意義な体験です。

海外へホームステイすることは、本人だけでなく送り出す家族も大きな不安を抱えますが、この交流事業は、最初にロ・ブ市の学生を受け入れ、その後、受け入れた学生宅へ派遣生がホームステイする仕組み。本市で共に生活し、交流することでお互いの理解や友情が深まるため「安心してわが子を送り出すことができる」と家族からも好評を得ています。

今回は、8月上旬にロ・ブ市から6人の学生が本市を訪れ、派遣生宅にホームステイしながら異文化体験や市民交流を実施。その後、8月下旬に本市の高校生6人をロ・ブ市へ派遣しました。

派遣生のレポートはいかがだったでしょうか。ロ・ブ市滞在で現地の文化、歴史、風景などを受け止めた彼女たちは、語学力の向上や異文化の学習、再び現地を訪問することなど、新たな目標も見つけたようです。紙面では紹介しきれなかった滞在時の様子や写真、ロ・ブ市からの学生受け入れの様子など、本年度の青少年交換交流事業の詳細をまとめた報告書を、市ホームページで公開します。こちらもぜひご覧ください。

（公開は年内を予定）

本事業に参加した派遣生と家族は「言葉の壁は大きくない。お互いが理解し合おうとする気持ち、思いやる気持ちが何よりも大切。それが心を通わせた交流に結び付く」と口を揃えます。この「心を通わせた交流」こそが本事業の醍醐味。次回は30年度の実施予定です。

派遣生はもちろん、その家族や友人、そして本特集を読んだ皆さん一人一人が、姉妹都市に興味や関心を持ち、歴史や文化への理解を深めていくことが、さらなる交流と多文化共生の社会づくりにつながります。遠くのまちとまち、人と人とが心を通わせる未来を目指して、まずは知ることから始めましょう。